

西南学院小学校学校長メッセージ

「学校通信 Wings2020 年 4 月号」

あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」 ヨハネによる福音書 第15章16～17節

1年生のみなさん入学おめでとうございます。在校生のみなさん進級おめでとうございます。

街角には色とりどりの花々が春風に揺られながら咲き誇り、新しい門出に心も浮き立つ季節ですが、今年は新型コロナウイルスという見えない嵐の中の船出となりました。学校で学ぶという子どもたちの権利が奪われてしまっていることに、持っていきようのない憤りとやるせなさを感じています。とにかく今は一日も早く日常が戻ってくることを願い、その日のためにしっかりと前を向いて歩いていくことだと思います。

ところで、少し前のことになりますが、朝日新聞の「声」（投書欄）に、「休校になって気付いた学校に行く意味」という14歳の中学生の投書が載っていました。次のような内容です。

新型コロナウイルスによる休校が始まってから2週間超が過ぎた。学校に行けない寂しさはあるものの、私は何不自由なく生活している。（ネットの利用などで）～中略～学校ですることが家で個人でもできるなら、わざわざ通学する意味は何だろう。今、学校生活と大きく違うのは「嫌い」なものに触れなくなった点だ。学校に行けば苦手な人と顔を合わせ、嫌いな教科も学び、時に退屈な時間を過ごすこともある。でもその苦みや雑味も含めた日々は、何にも代えがたい味わいがある。

好きなものばかり選び取るのは良くないこと。学校では勉強だけでなく、人との関わりや課題を乗り越えていく力、生きていくために必要な力も学ぶのだと、休校体験から気付いた。余裕がなく、騒がしくて息苦しいほどのあの日々が愛おしく、また、今を少し物足りなく思っている。

学校生活を通してでなければ育たない大切なことがあることを、改めて伝えてくれていると思います。本校の子どもたちも、学校を離れて改めて気付いたことがあるのではないのでしょうか。私たちも普段通りの生活を送ることがどんなに感謝すべきことであるのか、改めて気付かされているような気がします。

自分の意思に関係なく日常が奪われてしまったとしても、そのとき経験したこと、気付いたり感じたことをそのまま忘れてしまうか、それともその後の生活に活かすかは自分で選ぶことができるのではないかと思います。アメリカの神学者ニーバーの祈りを思い出しました。

神よ、
変えることのできるものについて、
それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、
それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、
変えることのできるものと、変えることのできないものとを、
識別する知恵を与えたまえ。

THE SERENITY PRAYER

O God, give us
serenity to accept what cannot be changed,
courage to change what should be changed,
and wisdom to distinguish the one from the other.

ラインホルド・ニーバー（大木英夫 訳）

休校の間、年度末の業務や新年度準備の他、新たな 10 年に向けて普段はなかなか取り組むことのできない研修等を行うことができました。タブレットやプログラミング学習の導入をはじめ新学習指導要領実施に向けての準備も進めてきました。ただ、今年度に限っては感染の影響がいつまで続くのか見通せず、状況に応じて対応していくしかなさそうです。子どもたちの成長にとって大切な行事についても縮小したり中止したりすることも避けられそうにありませんが、これからの1年が子どもたちにとってよりよいものとなるよう、職員一丸となって頑張っております。まだ暫くの間皆さまにはご不自由をおかけすることになりますが、どうかよろしく申し上げます。

(文責 宮崎 隆一)